

園を結び互いの保育実践を支え学び合う
ー公開保育で学び合う場を広げる1つの試みー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-04-04 キーワード (Ja): キーワード (En): Early Childhood Education, open class, Quality in Early Childhood Education and Care, school reform, learning network, Professional School for Teacher Education 作成者: 伊藤, 康弘, 嵩谷, 浩太郎, 大柳, 世津子, Ito, Yasuhiro, Dakeya, Kohtaro, Oyanagi, Setsuko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028980

園を結び互いの保育実践を支え学び合う —公開保育で学び合う場を広げる1つの試み—

福井大学大学院連合教職開発研究科大学院生（さくら認定こども園） 伊藤 康 弘
福井大学大学院連合教職開発研究科大学院生（和田こども園） 嵩 谷 浩太郎
福井佼成幼稚園 大 柳 世津子

福井大学連合教職大学院に大学院生を派遣している著者等が勤務する3つの幼保連携型認定こども園が、2018年から公開保育研究会を組織し、各園が年2回の公開保育を開催して、4年間に渡り互いの園の保育・教育実践を支え学び合ってきた。本稿は、4年間の「三園公開保育研究会」の活動を捉え直しながら、他園の公開保育から学んだこと、公開保育を開催して学んだことを職員アンケートから示すとともに、その変化の要因について検討するものである。

地域・規模・園種・園文化の違いを乗り越えて公開保育の実践を積み重ねてきたことが、三園の保育の質の向上や職員の意識の変容、すなわち園の変容に影響を与えてきたことが明らかになった。また、少子化の中で園改革の推進が求められるという文脈を持つ三園だからこそ、公開保育を通して学び合い、保育の変容、職員の変容に至ったと推察している。また三園は、教職大学院という学びの基盤があったからこそ、異質であっても公開保育の実践を4年間に渡り継続できたと言える。

課題として公開保育に臨時・派遣職員等の参加を保障する等、学びを広げることと、学びのサイクルを意識した公開保育の実践を試行する等の学びを深めることを述べる。

キーワード：幼児教育、公開保育、保育の質、学校改革、学びのネットワーク、教職大学院

I はじめに

近年幼児教育・保育の質の向上を求める声が高まってきた。例えば内閣府・厚生労働省は「保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会」の中で、保育の質を高めるための具体的な方策を議論・検討し、議論の取りまとめを公表してきた（厚生労働省 2019）。厚生労働省（2020）は、保育実践の質の確保・向上に向けた活動の中で、多様な視点を得るための「開かれた」取組が必要であるとして、公開保育を挙げている。また厚生労働省（2019）で公開保育は、「現場間で互いに保育を見合い、対話する機会を持つことは、保育の質の確保・向上に向けて各現場が自律的に取組を進めていく上で有効と考えられる」としている。

公開保育の意義を論じている先行研究を示す。

関勤（1980）は、公開保育の意義として、(A) 保育職員の協力体制の確立に果たす役割、(B) 保育職員の研修・現職教育に果たす役割の2つがあるとしている。(A) は、公開保育・研究集会を開催する園の保育者の協働的な活動を促進し、同僚性意識を醸成する。(B) は、保育者が専門職として学び続ける存在であるための必要性と、研修の機会としての意義があるとしている。

成田朋子（2014）は、K市の13園の保育者が共通意識をもって保育に取り組むために、K市が実施した公開

保育の助言者として関わった経験を詳細に検討し、K市の公開保育の事例が、保育者の研修として意義あるものと考察している。公開保育の意義を論じるための構成要素を示している。次に示す。(1) 公開保育に参加する全保育者が関わり、話し合いの中で共通理解を形成していくという全員参加の研修が、市全体の保育者の共通意識の育成に有効である。(2) 公開保育参加者が「いいところ探し」に努めたことが、公開保育後の協議を、参加者の経験をもとにした学び合いの場にした。(3) 公開保育での具体的な場面を共有して同僚同士が学び合い、対話が生まれて、参加者はたくさんの気づきを得た。(4) 公開保育前から公開園と参加者の日々の保育実践の中に埋め込まれたPDCAサイクルを顕在化させ、その後も取り組みが続けられている。(5) 経験者も新人も対等と同じテーマで協議を行っていて、公開保育が新人教育に有効であった。

さて田中雅道（2016）は、幼児教育の質の向上が園の重要な課題であるとし、自己評価と公開保育を組み合わせた保育の質の評価システムを提案している。自己評価から、各園が重要と考えている課題を、公開保育を通して主にコーディネータと公開園の職員の対話で深めていく。それが保育の質の向上につながると論じている。田中雅道（2016）は、公開保育を活用した幼児教育の

質の向上システム (ECEQ) に発展し、秋田喜代美 (2020) は、ECEQ の効果を検証しその良さと課題を明らかにしている。課題として公開園の職員の不安や負担の大きさ、また事後の振り返りの困難さを指摘している。同じ問いへの多様な意見が得にくい、新しい保育実践や新しい保育の考え方が感じられないという公開園の職員のアンケート回答が多いことも指摘している。コーディネータ以外の参加者の存在感の薄さやコーディネータの関わり方に、公開保育の成果が左右されていることが推察される。

最後に、福井市の公開保育の事情を説明する。幼児教育分野の「開かれた」公開保育の取組は、福井大学教育学部附属幼稚園の、毎年開催される幼児教育研究会の公開保育が知られている。また福井市の公私立保育園・こども園・幼稚園合同の公開保育については、2017年に福井市園内リーダー研修カリキュラムの中で「子どもの育ちを学び合う公開保育」が開催されたのが最初の試みであった。以降コロナ禍により園内保育に姿を変えたり、様式を変えながら継続している

その中でも、公開保育の取り組みは、福井大学大学院連合教職大学院 (以下「教職大学院」とする) に大学院生を派遣している、筆者等の三つの私立認定こども園が、2018年に公開保育研究会 (以下「研究会」とする) を立ち上げて、三園持ち回りの公開保育の実践を継続してきた。三園は、保育の質の向上を積極的に推進して、地域から期待される使命を果たし、利用者から選ばれる園になるために、試行錯誤を重ねてきたことが、研究会立ち上げの背景にある。

4年間の公開保育の実践は、三園の保育者の学びの場を広げ、職員の意識と保育の質を変容させ、三園が志向する園改革を後押ししてきたものと評価している。

本稿の目的は、三園の4年間にわたる試みを振り返りながら、職員アンケートから集約された、他園の公開保育からの学び、公開保育を開催しての学びを総括し、さらに三園の変容とそれを生み出した要因を考察することにある。

II 方法

三園のプロフィール

表1に三園のプロフィールを示す。三園は、表1に示すように、経営母体、小学校区、創立時の学校種、定員規模が同じではない。また地域社会から期待される役割や、理念や教育・保育方針が異なっている。

一方保育の質の向上への取組や子ども主体の保育等の共通点が見られる。共通点を以下に示す。

(1) 保育の質の向上への継続的な取組

三園は、園長主導で、2013年前後から園を変えよう、保育を変えようと試行錯誤を続けている。

(2) 幼保連携型認定こども園への早期の移行

子ども子育て新制度施行直後 (2015年～2016年) に幼保連携型認定こども園に移行して地域の新しい期待に応えようとしている。

(3) 教職大学院の連携校

2017年から教職大学院に職員を派遣して職員の学びの質を向上させることを期待している。教職大学院からの学びを園全体の学びにすべく活動している。

表1. 三園のプロフィール (2021年4月現在)

園名称	幼保連携型認定こども園 さくら認定こども園	幼保連携型認定こども園 和田こども園	幼保連携型認定こども園 福井佼成幼稚園
経営母体	社会福祉法人さくら会	社会福祉法人和田保育園	学校法人福井佼成学園
移行前の園形態	私立保育園	私立保育園	私立幼稚園
定員/現員	155名/171名	265名/232名	271名/264名
理念	1人の笑顔がみんなの笑顔に	輝くいのち～生きる喜び～	一人ひとりを大切に心を育てる
保育方針	1. 心と体の健康を育む 2. 共に遊び共に学ぶ 3. 自ら探求し表現する	1. 子どもの健康と安全を基本とした子育て支援の実施 2. 情緒の安定した生活ができる環境整備 3. 園での生活を通して、豊かな人間性を育む	1. 命や物の大切さを育む 2. 自ら楽しく学ぶ 3. 感動体験を共有し、自立性・共生・創造性を培う
小学校区 (地区)	松本小学校 (福井市北部)	和田小学校 (福井市東部)	木田小学校 (福井市南部)
校区内の1年生に占める卒園児数 (2021年4月1日)	16名/65名、25%	32名/96名、33%	42名/145名、29%
地域で期待される園の役割 (*1)	近隣の複数の園と同様の就学前児童の保育・教育	校区の2園の1つとして、就学時のスタートカリキュラムへの協力	地域の子育て支援センターとして機能する
園改革の模索開始時期 (*1)	2013年4月	2015年4月	2011年4月

(*1) 園長インタビューによる。

(4) 子ども観・保育観が似ている

子ども中心の保育を基本としつつ、集団保育による協働の学びから生まれる社会性の育ちを大切にしてきた。

公開保育研究会の設立・参加の経緯

研究会の設立・参加に至った経緯を、研究会の基盤である教職大学院への職員派遣の背景や思い、研究会設立・参画した理由を、三園それぞれの立場を説明する。

【1】 さくら認定こども園

(i) 教職大学院への職員派遣の背景

さくら認定こども園は、少子化が徐々に進行する福井市北部に位置し、半径2km圏に大学附属幼稚園、公立保育園・私立認定こども園・幼稚園等12園が点在している。圏内の園群の中に埋没しないために、2013年頃から園長・教頭主導で『保育の質の向上』活動、『園のブランド構築』活動を試行錯誤し続けていた。

(ii) 教職大学院に職員を派遣した思い

保育の質の向上活動は、活動の成果や全体像が見えずに悩んでいた。教職大学院に教頭を派遣したことが契機となって、活動の成果を言語化することや、全体像を見えるように整理することの助力が得られたことで、職員を巻き込んだ活動に膨らみ始めた。活動を継続していくためにも、職員派遣を続ける決定をし、2021年度までに計4名の職員を派遣し続けている。

(iii) 研究会設立を提案した理由

2017年さくら認定こども園が公開保育の会場園になった。公開保育の経験から、公開保育は園の保育を変える力があることを理解した。それで教職大学院の幼児教育の連携校の園の園長方に研究会の立ち上げを提案した。

【2】 和田こども園

(i) 教職大学院への職員派遣の背景

子ども子育て新制度・教育改革・保育料無償化・新型コロナウイルス禍による生活様式の大きな変化など、社会と子育ての環境がここ数年で大きく変化している。その変化によって、選ばれる園であるために必要とされる条件も変化してきていることに危機感を感じていた。

(ii) 教職大学院に職員を派遣した思い

教育・保育観の転換が求められる中、目の前の子どもたちにとって、自ら学べる環境は整えられているのだろうか。予測不可能な新時代が到来する中、当園における生活の中で子どもたちにどれだけの非認知的スキルが培われているのだろうか。興味・関心のあるものと出会い、その興味を広げる工夫はされているのだろうか。友だちと語り合い、自分の考えを説明したり対話したりする場、思いや考えを共有する機会は設けられているのだろうか、と疑問を抱き始めていた。今後、求められる教育・保育観への転換を図るべく、教職大学院へ職員を派遣した。

(iii) 研究会に参加した理由

園のリーダー層は、主体的・対話的な学び、非認知的

能力を育むことの大切さを研修等で理論的に理解していたものの、実際の保育の中でどう取り組んだら良いのか、今現在の保育をどう変えたら良いのかが分からない状況にあった。現場の職員は、目の前の子どもたちとの生活や日々の仕事に追われ余裕のない状況にあり、試行錯誤するゆとりすら無かった。また、前例踏襲の風土を変えようと考えていた。他園の文化に触れることで、何かしらのヒントを得て、当園に化学変化を起こしたいとの思いで研究会に参加を決めた。

【3】 福井佼成幼稚園

(i) 背景

2012年福井県における子育て世帯の女性の有業率は72.1%で全国3位であった(通商産業省2012)。保育ニーズは保育園に集中していた。そのため福井佼成幼稚園の歴代の園長先生は、幼稚園のままでは未来が描けないと判断していた。園の存続のため、認定こども園に移行することで生き延びる道を探ろうとしていた。

(ii) 教職大学院に職員を派遣した理由

幼稚園の文化に保育園の文化を融合させていく試みは、認定こども園開設準備期間(2009年～)から続けていたが、保育者主導の一斉保育が主流になるやり方を変えることは難しかった。今までのやり方に不便さがあるわけではない、今までの保育を変える必要性を訴える職員もいなかった。保育のやり方に疑問があっても、言い出しにくい雰囲気も多少はあったように思われる。

そこで、職員の思いや考えを揺さぶるべく、教職大学院で学ぶという仕組みを研修の制度として組み込んだ。子ども主体の保育に気づいてほしいという願いのもと、順に2年毎に職員が入学して学びを繋げてきた。年々保育に変化が見られ、「主体性」を保育の中心に据えることの大切さに気づき始めたことに手ごたえを感じたからである。

(iii) 研究会に参加した理由

職員が「子どもの主体性」の大切さに気づき始めた頃、福井市園内リーダー研修カリキュラムの公開保育を開催することになった。保育者には第三者から「見られる」という緊張感が漂っていた。しかし、参観後の研究会において「保育を認められること」や「助言をもらうこと」で職員が喜ぶ反応が予想外だった。その後の保育にも意欲的に取り組む姿が見られるようになり、公開保育の効果に私の公開保育への認識は180度変わっていた。三園での公開保育の研究会の誘いは渡りに船だったのである。

公開保育研究会の取組の特徴

研究会の特徴は、「園を変えたい」、「保育を変えたい」という三園の思いを反映している。下記に示す。

(1) 日常の保育の質の向上

研究成果・特別な取組の報告・発表や参観ではなく、日常の保育を参観し、その質の向上を目的とした。

(2) 試行錯誤中の過程を見る公開保育

完成された保育を見てほしいということではなく、悩みながら試行錯誤の過程を参観してもらうこととした。

(3) 「開かれた」公開保育

公開保育は、三園の職員ならば参加可能であり、他に保育・教育者でも参加可能とした。

(4) 公開保育の継続的な開催

年間の開催回数は、各園2回、計6回としている。三園の職員は年間4回の参加が可能で、回数を重ねることで三園の職員の同僚性の醸成に寄与したと考える。

(5) 保育参観後のグループ協議での振り返り

保育参観後に、開催園の職員と参観者、講評の教職大学院の教員がグループに分かれ、新人ベテランの分け隔てなく協議する。開催園の職員と参観者の学びが深く・広くなるように意図した。

Ⅲ 公開保育研究会の実践

研究会の立ち上げ

三園は、2018年4月の準備会(三園の園長、教頭が参加)で、次のような約束事を合意して公開保育を実施することにした。

- (1) 研究会は、教職大学院の連携校が、保育の質の向上を目指して実施する。
- (2) 公開保育が子どもや職員の負担にならないように、開催園が日程や研究テーマを、自由に決めて良いとする。
- (3) 標準のプログラムを表2に示す。公開保育実施園は、事情に合わせて変更可能とする。

表2. 公開保育の標準のプログラム

時間	プログラム
90分	保育参観
90分	研究会 1. グループ分け 年齢別グループに分かれる。 2. 説明 担任が保育の狙いを説明する 3. グループ協議 参加者による協議を行う。 省察・感想を付箋に記し記録とする。(付録1) 4. 講評 先生方から講評をいただく

公開保育研究会の実施

公開保育は、2018年から開始し2020年以降コロナ禍の中でも、回数を調整しながら継続してきた。公開保育の実施状況を表3に示す。

2019年度の合同研修会の開催

公開保育研究会が始まり一年目の計6回の公開保育を終えて、2年目に入った時、「なぜ保育を変える必要があるのか?」という問いが、職員の気持ちの中で生じ始めていた。三園の園長の間では明らかではあっても、教職員全員と保育を変えることへの思いが共有できていないもどかしさがあった。

講師に教職大学院の松木健一教授(当時)を迎えて、幼児を取り巻く社会の姿や今求められる保育の必要性、教育改革の流れ等の講義とそれを聴いてグループ協議をする三園の合同研修会を開催した。福井俊成幼稚園のホールに三園の全職員の95%に相当する約110名が参加した。各園の意気込みが感じられる場となった。

講義後のグループ協議では、少人数に分かれて各々が講演を聞いて考えた内容を発言し書き込んだ付箋を模造紙に貼り付けて各グループの意見を取りまとめた。

講義を聞き、対話をして、自らの保育を振り返ること、参加者が保育を変えていく糸口を見つけてもらえたのではないかと。また公開保育研究会を継続して、園や保育を変えていく共通の認識が生まれたのではないかと推察している。

2020年度の公開保育の開催

2020年度の研究会開催決定までの過程を紹介して、研究会の継続への三園の思いを紹介する。

2018年4月開始から3年目を迎えた研究会だが、新型コロナウイルスの感染者が増えている状況下、2020年度の実施開催について、三園は園内、園外で議論を重ねた。

コロナ禍以前は保護者が、自由に園舎内に出入りして、各教室にて園児の登降園の引き渡しをしていたが、コロナ禍以後は園舎内への出入りを制限していた。また、年中行事も園舎内は使用せず、園庭や屋上などの屋外を利用する等のコロナ対策が行われる中で、公開保育を実施しても良いものか。各園の教職員の意見は様々だった。

三園の園長が協議した結果、県内のコロナ情勢が落ち着き始め、休校していた学校が再開されるタイミングで、6月にさくら認定こども園の公開保育実施に踏み切った。そして、夏休み期間の8月に福井俊成幼稚園にて公開保育を実施した。和田こども園でも10月に公開保育を開催することに決定した。

コロナ禍のため、他園との交流ができない状況で、三園が独自に実施していたコロナ対策についてグループ協議時に情報共有する機会ともなり、三密回避の参考とすることができた。

コロナを恐れる余り殻に閉じこもり閉鎖的になってしまいがちだったが、できる限り安全な状況で他園との交流方法を模索することで学びを止めないことの大切さを痛感した。それは、実際に子どもの様子を生で見、その同じ場面を共有した教職員が対面で語り合うことから生まれる学びである。

2020年度のコロナ禍における公開保育実施までの三園の意思決定の過程は、他園との対面による交流を如何に継続していくかを示す、意味ある取組となった。

表3. 公開保育研究会の公開保育の実施状況

年	月日	時間	会場園(*)	公開保育対象	研究テーマ
2018	6月22日	9:00～12:00	さくら	4・5歳児	子どもの育ちを学び合う
	7月5日	9:00～12:00	和田	4・5歳児	子どもの育ちを学び合う
	10月16日	9:00～14:00	福井俊成	全クラス	子どもが夢中になる遊び
	10月25日	9:00～14:00	さくら	全クラス	子どもの遊びと生活の中で主体性を引き出す
	10月30日	9:00～12:00	和田	4・5歳児	子どもの育ちを学び合う
	2月12日	9:00～12:00	さくら	全クラス	子どもの遊びと生活の中で主体性を引き出す
2019	6月7日	9:00～12:00	さくら	全クラス	子どもの思いを聞き保育者主導になっていないか
	7月2日	9:00～12:00	福井俊成	4・5歳児	子どもに寄り添う
	8月6日	9:00～12:00	和田	4・5歳児	子どもの育ちを学び合う
	9月7日	13:00～16:00	福井俊成	福井大松木健一教授講演会・研修会	
	10月11日	9:00～15:00	福井俊成	全クラス	子どもの育ちを学び合う
	10月29日	9:00～15:00	さくら	全クラス	子どもの育ちを学び合う
	11月13日	9:00～12:00	和田	0・1歳児	子どもの育ちを学び合う
	2月12日	13:00～16:00	さくら	3・4・5歳児	対話を大切に 学びを深める
2020	2月18日	9:00～12:00	和田	4・5歳児	子どもの育ちを学び合う
	6月12日	9:00～12:00	さくら	3・4・5歳児	夏祭りに向けたお友達との関わりと保育者
	8月19日	9:00～12:00	福井俊成	3・4・5歳児	縦割り保育の中での水遊び
2021	10月13日	9:00～12:00	和田	3・4・5歳児	子どもの育ちを学び合う
	6月16日	9:00～12:00	さくら	0～5歳児	新しい時代の保育実践 当たり前を見直す
	7月16日	9:00～12:00	和田	全クラス	アクティブラーナーを育てよう
	10月21日	9:00～12:00	さくら	0～5歳児	新しい時代の保育実践 当たり前を見直す
	10月28日(**)	9:00～12:00	福井俊成	0・1・2歳児	子どもの育ちを学び合う
11月9日(**)	9:00～12:00	和田	3・4・5歳児	アクティブ・ラーナーを育てよう	

(*)さくら：さくら認定こども園、和田：和田こども園、福井俊成：福井俊成幼稚園 (**)実施予定

Ⅳ 公開保育が生んだ変容の事例

公開保育研究会を継続してきた4年間に、三園の職員の成長や三園の変容が見られている。この成長や変容は、三園固有の実践の取組と公開保育研究会の実践の取組が源となっていると推察できる。公開保育研究会4年間の職員の成長や園の行事の変容を実践例で示す。

公開保育での職員の成長

参加している職員の成長をグループ協議でのコメントの変化で示す。2018年6月の公開保育での参加者（福井俊成幼稚園）のコメントを以下に示す。

泥だんごをトイの中で転がそうとしている子が、平地になると止まってしまうことに『なんで?』の一声。試行錯誤しながらも、トイを工夫するのではなく、泥だんごの方を改良すれば上手くいくと考えている様子。子どもの発想は面白いと思った。

公開保育を始めた2018年6月の、遊びの状態や子どもの動きや発想を捉えようと注視している様子が伺える。

2020年8月の公開保育でのグループ協議の参加者（福井俊成幼稚園）のコメントを以下に示す。

凍った氷の中のボールを取ろうと数人の子が集まっている。「太陽にずっと置いておいたらいいよ。」「水をかけるといいんじゃない。」等いろいろと意見が飛び交うが、他児の子の意見を否定せず、試しているのが良かった。

子どもの発見や言葉、動きにその子なりの意味があることを感じ取り、共感しながら寄り添った観察をしている。公開保育に繰り返し参加することにより、保育を客観的に観察し、更に共感的に観察できる眼差しが鍛えられていることが伺える。

他園からの学びが行事の変容に

福井俊成幼稚園の公開保育に参加した和田こども園の職員が、公開保育で学んだことを、和田こども園の行事改革につなげた事例である。

2018年6月の福井俊成幼稚園の公開保育研究会で、子どもたちが創意工夫しながら制作した、手作りのおみこしが展示されていた。

5歳児同士で話し合っってテーマと制作分担を決め、3～5歳児の縦割りで、おみこし制作に取り組んだと福井俊成幼稚園の職員から聞いた。保育者は子ども達の制作を見守っていたとも聞いた。

和田こども園では、上記のおみこし制作の事例を参考

に、2018年の夏まつりから子どもたちの興味・関心のあるテーマにより4・5歳児合同でおみこしを制作することにした。日々のコーナーあそびからテーマが決まり、子どもたちが2基のおみこしを制作した。

この時おみこし制作に積極的ではないが、おみこしを担ぐことに楽しさを感じたり、制作活動を見ることに興味がある子どもたちがいた。そこで、夏まつりという行事に子どもたち全員が楽しく関わるためにどうしたら良いかを保育者間で相談し合った。その結果、夏まつり当日のおみこしごっこへの参加は、おみこしを担ぎたくない子は無理をさせず、おみこしを担ぎたい子は何度でも順番を待てば担げるようにした。また、おみこしごっこ同様に盆踊りも、参加したい子は何度でも踊れるようにするなど、子どもたちの参加の仕方を工夫することになった。

和田こども園の従来のやり方は、クラス毎に一基のおみこしを制作し、そのおみこしにクラス全員の制作物を保育者が見栄え良くするために飾り付けする等のやり方をとっていた。また、おみこしごっこもクラス全員が、2回ずつおみこしを担ぐ順番を決めて、自分の順番が来るまでは友達を応援しながら待つというやり方だった。職員は、クラス全員を平等におみこしの制作とおみこしごっこに参加させないといけないと思いついていたのである。

2018年以降、和田こども園の夏まつりは前例踏襲のやり方から解放され、毎年新たな工夫をすることで変化し続けている。例えば今まで雨天決行のため、園舎内で実施していた夏まつりが、2020年は、コロナ禍を考慮して、園庭と園舎内を併用して、学年毎に二部制で開催した。2021年は和田小学校の体育館を借りて3・4・5歳児を縦割りにした二部制で実施した。

保育者が固定観念に縛られることがなくなったため、新しいアイデアが次々と提案され始めた。また保護者に見てもらおうための行事から、子どもたちによる子どもたちのための行事へ変えようという起点になった。

V 他園の保育実践からの学び

三園の公開保育研究会の取り組みについて自由記述形式の三園の職員アンケートを取った。寄せられた回答から他園の公開保育参加で得られた学びを、三園共通の学び、三園それぞれの学びに分けて説明する。

共通の学び

- (1) 若手職員、臨時職員の意欲が引き出せた。公開保育に参加する機会が年4回あり、日頃園外の研修に参加できない、2～4年目の職員や臨時職員が、公開保育に参加する機会ができた。後日参加した職員から新しい提案が出てきて、職員の意欲の高さを感じている。園内研修や園内会議時の職員の積極的な発言が増えている。
- (2) 他園の施設・設備・環境構成・保育活動を参観で

きて参考になった。例えば行事時のホール全体の使い方、コーナーの構成、園庭全体の使い方は高い視点で見ることを教えてくれた。また手作りおもちゃ等の工夫は自園ですぐに取り入れて効果を感じている。

- (3) グループ協議で、共通の悩みや頑張り認め合い、それが明日への活力になった。
- (4) 俯瞰的に他園の保育を参観できて、職員の動きを第三者視点で観察できて、よく理解できた。

さくら認定こども園の学び

- (1) 日常的に自身が素早い応答性を要求される子どもと保育教諭の対話の場面を、客観的に観察できた。自身の保育を振り返り、見直しができた。言語化しにくい保育教諭の活動を観察できて、子どもとの対話の進め方や子どものつぶやきの拾い方の参考になった。
- (2) 観察した子どもの遊びや子どもの発見したことをグループ協議で他園の保育教諭と語り合えて、新しい視点からの子どもの姿を得て、子ども理解が進んだ。他園の保育教諭と共感的な意見交換することでの学び合いを楽しみと感じた。
- (3) 同じ職員が何度も公開保育に参加することで気づきが深くなり、視野が広がった。1回目は建物・設備・掲示物に気を取られているが、期間をおいて2回目の参加で自園とは異なる保育の工夫や子どもの様子に気づき始めた。

和田こども園の学び

- (1) 他園の保育環境を参考にすることで、保育環境への固定観念から開放され、より良くするための選択肢が広がった。それぞれのクラス毎に当園で可能な環境設定を担任間で話し合い考えながら、取り組み始めた。自分のクラスの子どもの現状を踏まえ、保育室のレイアウトを変更したり、子どもたちの興味関心を考慮した「コーナーあそび」の場を設けたりするようになった。
- (2) 他園の保育者の保育実践を観ることで、自分自身の保育を振り返る機会になっている。客観的に他園の保育教諭と子どもたちとの関わりの様子を見て、「あの場面で私ならどう関わったか」と振り返り、子どもたちが遊び込む様子を見て「子どもたちはどんな気持ちで遊び込んでいるのだろう」と子どもの見取り方を学ぶ機会にもなっている。

日常的な業務の中では、自分自身の保育実践について吟味するゆとりはない。公開保育に参加するための時間が、そのまま自分自身を振り返るゆりの時間となり、日常的な業務から解放された貴重な時間となっている。

- (3) 子どもたちの姿を客観的な立場で見ることで、子どもたちの主体的な活動を促すための手法や手段が明確になり、理論から実践への道筋が見えてきた。より具体的なイメージができたことで、見様見真似ながらもアクティブラーニングの足掛かりとしての活動を取り入れ始

めた。

福井佼成幼稚園の学び

- (1) 他園の保育を観ることで、自園では気づけない学び(かかわり方・寄り添い方・言葉のかけ方)があり、その学びについて思いを深める機会になった。
- (2) 保育参観後のグループ協議に参加し、他園の先生と保育を語り合うことが刺激となり、自分の保育を見直し自分ならどうするだろうと考えるようになった。
- (3) 他園の環境設定や子どもの姿を客観的に観ることで、他園の環境や子どもの姿から振り返り、自分の課題が見えてきた。

VI 他園の保育実践を支える

三園の職員アンケートから公開保育を開催して得られた学びについて説明する。公開保育開催して得られた学びを、三園共通の学び、三園それぞれの学びに分けて説明する。

共通の学び

公開保育を開催する三園の職員に、学びの機会があり、保育の質の向上に寄与したことを共通の学びとして示す。

- (1) 保育を言語化できるようになった。自分たちの保育を語り合い、折りに触れ考えた発言ができるようになった。それは研究会のグループ協議の時間に、自園の職員が自分たちの保育の目的・狙い、本日の子どもたちの様子を自分の言葉で説明することから学んでいたのだろう。
- (2) 保育を第三者の視点で見る気づきを知った。良い点も悪い点含めて気づいてことを他園の保育教諭や講評の先生方に教えてもらった。特に良いところを教えていただいたことは、自信になった。また明日への保育の意欲が湧いた。

さくら認定こども園の学び

- (1) 他園の先生方が公開保育で参観に来られることを意識して、各クラスの担任の活動が活発になった。公開保育の参観中という緊張感の中で、今まで学んできたことを意識しながら保育できた。
- (2) 参観者からクラス担任が気づかない子どものつぶやきや動きを第三者の視点で教えてもらい、たくさんの気づきを得た。
- (3) 公開保育での講評の先生の質問や感想から同じクラスの先生方と振り返ったり話し合ったりすることが楽しい学び合いであった。例えば講評の先生から「プロジェクト保育を3歳児以上のクラスで行うには、2歳児クラスでその準備をしないといけないけど」という問いを契機に、2歳児クラスの担任が、今までの子どもの活動の活動をプロジェクト保育の準備という視点で振り返っ

たり、3歳児クラスに進級した時のプロジェクト保育のことを話し合いしていた。講評の先生の問いかけを前向きに捉え保育を振り返ることに手応えを感じていた。

和田こども園の学び

- (1) 公開保育を実施後のグループ協議が、教職員一人ひとりの振り返りの機会となっている。自分たちが何をねらいにして保育実践しているのかを語り、他園の保育者からの問いかけに答えることで、日々の保育実践が言語化され、意味づけされている。
- (2) 保育を参観してもらい、自分の実践を褒めてもらい認めてもらうことは、保育者としての自信に繋がり、自己肯定感とモチベーションが高まる機会になっている。
- (3) 当園の教職員全員が公開保育の実施に対して前向きであるとは言えないが、悩んでいたことを解消するためのヒントが得られて良かったと公開保育を実施する良さも徐々に浸透してきている。

福井佼成幼稚園の学び

- (1) 同じエピソードを異なる視点で語り合える。子どもの遊び込んでいるエピソードを違った視点で聞くことで、自分では気づけなかった子どもの姿に気づけた。
- (2) 保育を褒めてもらうことで自信が持て、保育への励ましや助言を得て、新しい試みをやってみたくなった。また日頃は当たり前のルーティンの活動に対して疑問や意見をもらい、改善のきっかけになった。
例えば助言からおもちゃの数を減らした方が良さそうなことや、お片付けを子どもの学びに捉え直しできることに気づき、環境を変えて子どもの変化を試したくなった。

VII 園の変容とその要因

4年間の公開保育の積み重ねが、保育が変わり、職員の意識が変わり、園が変わった第一の要因と考えている。最初に研究会が継続できた要因について考える。

研究会が継続できた要因

研究会が4年間の実践を継続できた要因について職員の立場、園長の立場に分けて考察する。

- (1) 職員のやる気を引き出した要因
- (i) 他園の保育への興味・関心

公開保育研究会を開始した時には、自園と異なる他園への興味だけであった。2回目以降の公開保育では、視点の異なる他園の保育実践への、尽きない興味が引き出されていた。

- (ii) 選択肢のある参観内容

0歳児～5歳児まで、各園でそれぞれ異なるテーマを掲げて日常保育を参観することにしたので、職員の多様な興味に応えられた。

- (iii) グループ協議から生まれる同僚性

保育参観後に、グループ協議の時間を持たた。三園の

職員の楽しい学び合いの時間を持って同僚性が生まれた。

(iv) 研究会への教職大学院の教員の参加

毎回の研究会に、教職大学院の教員の参加を依頼している。教員の講評を聞くことで、職員は保育の仕事を専門職として捉え直せたのではないかと推察している。開催園の職員は、自らの保育実践を語り、保育の専門性を高める機会となっている。

(2) 三園の園長が研究会を続けた要因

(i) 園を変革し保育を変えるべき少子化の進展

公開保育研究会の設立・参加の背景にある、少子化が年々進展していることから、三園の園長は、それぞれの園の文脈の中で公開保育を推進してきた。園を変えていこう、保育の質を向上させようという目標に揺らぎはなかった。

(ii) 開催園になることの学びは大きく、負担は少ない

公開保育研究会は日常の保育の質の向上を目標にしている。したがって日常の保育を参観してもらうので、開催園の職員の負担は少なく、開催園の効用は大きい。

(iii) 職員が教職大学院で学び、その学びを園に持ち込んで変革への刺激を与えている

三園の職員が院生となり、毎月教職大学院で学び合いをしていることが、公開保育研究会を継続する力になっている。

さくら認定こども園の変容

(1) 一人の職員の1つの変化の多数の積み重ねが園の変容を生み出す

他園の先生から、子どものハサミの使い方が安全ではないと指摘された。保育者自身はそう思えなかった。それで教頭やクラス担任の先生と話し合ったりして、ハサミを使った活動を考え直してみた。その結果以前のクラスで一斉にハサミを使っていたことの方が、危険度が高いという結論になった。その助言を契機に、子どもたちのハサミの使い方の活動を見直す提案ができた。また職員全員が、ハサミの使い方の実践を共有できた。そして別の職員は同僚と、ハサミ等の制作に関わる道具や材料置き場での配置を見直し始めた。

このように一人の職員が変わるとその変化がクラスに広がり、園全体の変化へ波及していった。1つの変化が別の新たな変化を生み、変化の連鎖が時間をかけて園全体に広がり、さらに数カ月後に新たな変化の広がりが積み重なっていった。これが園が変わったとか、保育が変わったと捉えられると考えている。

(2) 研究会の講師の講評が保育者の専門性の向上につながる

公開保育後のグループ協議で、教職大学院の教員が、開催園の保育実践を取り上げて、第三者視点で言語にして説明してくれる。さらにその上位の概念を言葉にしてくれる。その積み重ねが、職員の自己満足でない保育の専門性を高めて、職員の士気の向上につながっている。

和田こども園の変容

(1) 公開保育に参加した職員の変容

公開保育を積極的かつ継続的に行うことで、参加した職員が思考を巡らせ主体的に行動を起こすようになってきた。他園の保育環境や保育実践を観ることで何かしらの刺激を受け、その刺激と自分自身の保育実践をどう結び付けるか。日々子どもたちとの生活の中での困り感を解消するためのヒントを見つけ、それをどう活かすか。三園それぞれに特色があり、設備も全然違う。初めて各園を訪れた教職員は、素晴らしい設備や環境に目を奪われ、無い物ねだり的な感想が先立つことになる。しかし、何度か継続して参加することで、保育者と子どもとの関わり、遊びの中での子どもの学び、目の前の子どもの状況に合わせた細やかな工夫に気付かされる。そして、他園での実践をそのまま自園に持ち帰っても出来ることと出来ないことがあり、どうすれば自分のクラスで同じような意味合いの取組ができるかを考えるように変容してきた。

(2) 公開保育に参加した職員からの波及効果

公開保育に参加した教職員が公開保育での気付きをペアのクラス担任に話す、そして一緒に考え工夫する。この繰り返しで園全体の変容を生み出している。一人ではアイデアにも限界があるので、他の教職員に相談して、またヒントを得ようと対話していく。これが自然と職員間のコミュニケーションにつながり、意味ある雑談が増えてきている。堅苦しい会議では言えないような素朴な疑問や質問があったり、冗談交じりの発言に笑いがあったりと、子どもたちの成長や学びの場面を楽しそうに語り合う姿が、和やかな雰囲気を生み出している。保育者一人ひとりが主体的に思考を巡らせ子どもたちと関わり、子どもたちの遊びに変化が現れていることを職員みんなで楽しんでいる。

(3) 園長、管理職にとっての公開保育の意義

三園の公開保育には、できるだけ園長及び管理職も参加して現場教員と同じ場面を共有できるようにしている。また、各園での教育・保育の質の向上のための取組や園運営に関する課題についても話し合える場、情報交換のできる機会として、園長や管理職にとっても有意義なものとなっている。

福井佼成幼稚園の変容

(1) 自らの保育を言語化し保育の良さに気づくことで保育者が自信をつけた

公開保育を重ねることで、緊張感よりも期待感が強くなり、グループ協議では積極的に発言し、自分の保育を語る姿が見られるようになった。また、多くの学びを得ながら、他園の良さと共に自園の良さにも気づくことができるようになり、自信をつけてきたと考えている。

(2) 開催園となることは保育の質を向上する機会

公開保育で得るものは大きい。自分たちがやっていることが外部の方々の目にはどのように映るのか。たとえ

評価が分かれても、ある意味では自信をつける機会であり、また助言を受けて向上できる機会ともなるのである。公開保育は、最終形を見せるのではなく、発展途中の保育の姿をそのまま見せていくという申し合わせが職員の抵抗感を小さくした。更に、教職大学院の教員の講評がいただけるという、自己満足では終わらせない仕組みが成果をもたらせたと考えている。

三園の変容とその要因

2018年から始まった公開保育の実践の積み重ねは、三園の職員一人ひとりの学びの場を広げ、職員の意識と保育の質を変えてきた。さらに公開保育が持つ柔軟で多様な学びにより、2013年頃から三園がそれぞれの園長主導で始めていた園の保育を変えようという活動は、現場の職員に静かに浸透しつつ園を変えてきたと推察している。

三園の変容を生み出した要因は、地域の少子化を背景とする園改革の推進という文脈の中で、公開保育を定期的に開催することにより、異質な三園の職員が学び合い、多くの職員の多様で多層な気づきに変容を起こしたと推察している。つまり公開保育を位置づける必然性がなければ、公開保育実践の積み重ねや公開保育を開催して学びを積み重ねることは難しかったと考えている。

Ⅷ 成果と課題

成果

本節は、三園の変容の要因を概観し、Iで紹介した先行研究を取り上げて比較を試みる。

三園それぞれの保育を変え、園を変えてきた一番の要因は、4年間の異質な三園の公開保育の実践の積み重ねである。職員一人ひとりが公開保育の場で、俯瞰的に他園の保育を観察し自園の保育を振り返り、保育という営みを語り合い、省察と気づきを積み重ねてきたからといえる。省察と気づきには固有の文脈があることから、「気づきの物語」と呼んでよいだろう。

三園の職員一人ひとりの多くの「気づきの物語」がつながり、例えば蜂の巣のネットワーク構造のように形成されたものが、園の変容の本質なのだろう。その気づきを生み出したのは、まさに4年間の公開保育の継続であった。Iの先行研究は、長期に渡って公開保育を継続することの効用や意義には言及していない。

二番目の要因は、少子化を背景とした三園の直面している文脈の中でこそ、「公開保育を続けること」が活かされたということである。その文脈は、地域の少子化を前に「保育の質を向上させたい」、「保育を子ども主体に変えたい」、「園を変革したい」という、三園の園長の思いであった。その文脈があればこそ、公開保育の開催自体を目的にすることなく、公開保育という強力な道具が活かされたと考えている。

2020年に始まったコロナ禍により少子化は急激に進行しており、三園の公開保育を継続する文脈は今後も変

わらないであろう。公開保育開催の目的化についてもIの先行研究は、言及していない。

三番目の要因は、三園共通の学びの基盤として、教職大学院の存在である。異質な三園が集まって公開保育で学びを深めるためには、三園が教職大学院に職員を派遣しているという、学びの共通な基盤が必須であった。そうでなければ、三園の信頼関係の構築さえ覚束なかったのではないかと推察する。「教育改革」、「学校改革」、「OECD2030」のような学びが共通にあるからこそ、園改革への志は揺らいでいないのだろう。成田朋子(2014)は、自治体を基盤とした公開保育による学びを事例としているが、公開保育を活かす学びの基盤については言及していない。

四番目の要因は、公開保育に参加している教職大学院の教員の存在であった。毎回の研究会で教員の講評の中で開催園の保育の営みが言語化・抽象化されたことが、職員に保育職を専門職として意識させ、職員の士気を高めたと推察している。秋田喜代美(2020)のECEQにおけるコーディネータと役割は類似点が多い。第三者視点を持つ外部の研究者の継続的な参加は、公開保育の意義を高めると推察している。

課題

研究会の課題を三園の園長の自由形式アンケートからまとめた。その要点を下記に示す。

(1) 全職員が公開保育に笑顔で参加できる

これからの公開保育の学びを展開するために、臨時・派遣職員、給食職員等も含めて全職員が参加できるように公開保育の輪を広げていきたい。全職員が、何回も余裕をもって参加できる園内の体制づくりが課題である。

(2) 公開保育の場の学びを全職員が共有できる

公開保育に参加した職員の学び・振り返りを、参加できなかった職員と共有できる場を作り、学びを共有できるようにし、その学びが広がり、深まるようにしたい

(3) 公開保育を超えた職員交流を図る

公開保育研究会の活動をさらに推進して、定期的な交換実習に発展させたい。異質な文化を体験・経験することは、新しい視点を考えるきっかけを提供する。他園の職員との対話を楽しみ、自園にない文化を見たり聞いたりして新しい見方を知る。そして、良いと思ったことを自園に取り込むためにどうすべきか、悩み考え相談しながら、自らの保育を進化させ続けたい。

(4) 学びのサイクルを意識した公開保育にする

成田朋子(2014)で指摘している「日々の実践に埋め込まれたPDCAサイクル」のような学びのサイクルを意識した公開保育として得られる学びを深めたい。

Ⅸ 終わりに

三園がそれぞれの園の課題・地域の課題に向き合い、切磋琢磨しながら、地域の幅広いニーズに応えられる「し

なやかで強い園」を目指していきたい。

また三園は、公開保育研究会での学びを通して、新たな取り組みを共有し、共に成長し、さらに若手育成のための「学習する組織ネットワーク」を目指したい。

用語

本稿では、以下の意味で用いている。

保育者：保育士、保育教諭、子育て支援員、栄養士、調理員等の子どもと直接的・間接的に接する職種

職員：保育者、事務職員等の園で勤務する全職種

管理職：園長、教頭、主幹保育教諭

参考文献

厚生労働省 (2019) 「子どもを中心に保育の実践を考える」保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会

厚生労働省 (2020) 「議論のとりまとめ」保育所等における保育の質の確保・向上に関する検討会

関勤 (1980) 「公開保育の意義と重要性 - 幼稚園や保育所の研究発表会はなぜ必要か」『茨城大学教育学研究紀要』第 13 号, pp. 113-120

田中雅道 (2016) 「公開保育の実施で幼児教育の質の向上を目指して」『私幼時報 8 月号』VOL.386, p.1

成田朋子 (2014) 「公開保育への取り組みと保育者の成長」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第 36 号, pp.9-18

秋田喜代美 (2020) 「公開保育を活用した幼児教育の質的向上システム (ECEQ) の質的検証～園の独自性や多様性を尊重した効果的な学校評価の検討～」東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター

通商産業省 (2012) 「平成 24 年度 就業構造基本調査」

付録

1. 公開保育時の研究会の成果

保育参観後、年齢クラス別にグループ協議を実施し、公開保育の内容や自園の保育を省察した結果を記録としている。2021年6月16日実施の公開保育のグループ協議の成果の一部を下記に示す。

偶然性をいかに大切にするか ✓子どもの視点 ✓時期 ✓保育者の関わり	サンドイッチプロジェクト 絵本→フルーツサンドを駅前に見に行く→野菜(きゅうりを育てる)→折り紙で作る→実際に作ってみよう!	虫 出合い方 仲間 年長者	砂 ・工夫 ・子どもりの終い ・先生の存在	保育教諭も裸足で園庭にいる 子どもと同じ感覚・感觸を保育者が味わうことを大切にしている。
さくらにおける 当たり前 2歳児にとっての 当たり前	の中にダンゴ虫 小さな石を入れる 大きい石をわたすと「ダンゴムシがちぎれちゃうんだよ」と言って入れない	砂遊び 子ども達から「みかん、おにぎり、ホットケーキ、ラーメン、お茶、牛乳、お汁、スパゲッティ…」いろんな食べ物がでてきて、イメージする力、想像力がすごい! 「どんなラーメン?」「大きいラーメン」「つるつるラーメン」	子どもが自分でとれる場所に用意をしている	ケーキ屋さんに見に行く! 本物が見れる環境と経験を提供できることが素晴らしい。
虫 虫カゴではなく透明な容器が良かった			砂遊び 1人でじっくりあそんでいるが、周りの友達の動きや言葉を聞いて刺激を受けて、影響されていた	砂遊び フライパン、フライ返し、おたま、ろうとなど砂場のおもちゃのそれぞれの機能や使い方を分かって上手に使っている
サンドイッチ 折り紙で貼る・選ぶ・破る	サンドイッチ 緑と紫のぶどう →赤ちゃんだから食べられない 苺を育てた事がつながる	1つのあそびに飽きることなくじっくり遊び込んでいる☆	砂遊び中だんご虫を発見!! 「かわいいね」	

図1. 公開保育時のグループ協議内容 (2021.6.16 於: さくら認定こども園)

Connecting Centers for ECEC* to Support and Learn from Each Other's Childcare Practices:

An Attempt to Provide Learning Opportunities from Open Class

(*)Early Childhood Education and Care

Yasuhiro ITO, Kotaro DAKEYA, Setsuko OYANAGI

Keywords : Early Childhood Education, open class, Quality in Early Childhood Education and Care, school reform, learning network, Professional School for Teacher Education